

現代産業科学館における総合的な学習の時間に関する学校支援の在り方 ～小学校高学年を対象にしたキャリア教育のプログラム案作成をとおして～

*佐々木 善裕

Yoshihiro SASAKI

要旨：現代産業科学館における総合的な学習の時間に関する学校支援の在り方について、当館の学校とのかかわりの現状をもとに浮き彫りになった課題と、小学校が抱えているキャリア教育に関する課題の、双方の解決が図れるようなプログラム案を構想し、その内容について総合的な学習の時間の一般的な学習過程にそってまとめた。

キーワード：総合的な学習の時間 学校支援 キャリア教育 探究的な学習 協同的な学習

1 はじめに

平成 14 年度に総合的な学習の時間が創設された際、学校と博物館等の社会教育施設との連携について可能性が広がることが予想された。また、平成 20 年 3 月告示の現行学習指導要領の総合的な学習の時間の章の内容の取扱いの配慮事項の一つに、「学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などの工夫を行うこと。」と記されるなど、国の方針として学校と博物館等の社会教育施設との連携が明確に示された。

しかし、現状は学校と博物館等の連携が進んでいるとは言い切れない部分がある。それは学力低下問題から各教科等の時間を削減して創設された総合的な学習の時間がその要因であるという誤解が生じ、総合的な学習の時間の取り組み自体が不十分であるということ、学校と他機関との壁が依然高く、両者の関係をコーディネートする人材・手立ても乏しく、コミュニケーションが十分に図られていないことなどに起因すると考える。

一方、千葉県立現代産業科学館は使命の一つとして「県立博物館として高い専門性と幅広い活動を維持し、地域の各種団体との親和に留意するとともに産業界、学校教育、NPO組織等との連携を密にして県民のニーズに応えます。」と謳われている。また、小学生の来館者が多い、校外学習のコースとして設定している学校がある、職員の中に教員経験者が複数いるといった実態から、他の博物館よりも学校との連携が図りやすい環境にある。

そこで、当館の使命を実現しつつ、上記の課題の解決を図りたいと考え、本主題を設定した。

2 学校とのかかわりの現状

(1) 校外学習の現状

平成 26 年度の小学校の校外学習による来館者の実態を学年別・地域別に学校数でまとめてみた。近隣地域としては、徒歩または公共交通機関で無理なく来館できる地域ということで、若干広めではあるが市川市・船橋市・浦安市・習志野市・江戸川区・葛飾区を設定した。また雨天時のみ来館の学校数を（ ）内に表示した。つまり左上の項目で言うところ近隣地域の小学校 1, 2 年の場合、14 校が当館の校外学習を希望し、そのうち 10 校は雨天時のみ当館に来るということを表している。

表 1 校外学習の地域ごと・学年ごとの実施校数

| | 近隣地域<校> | 遠隔地域<校> |
|------------|---------|---------|
| 小学校 1, 2 年 | 14 (10) | 31 (30) |
| 小学校 3, 4 年 | 27 (7) | 31 (13) |
| 小学校 5, 6 年 | 2 (0) | 16 (0) |

この表から以下のことが読み取れる。まず高学年の利用が少ないことである。このことは当館が「学びの場」よりも「遊びの場」としてより強くとらえられていることを意味する。実際に校外学習で来館した児童の様子を見ると、主に「創造の広場」で各「展示物」を使用し「遊んでいる」姿が多く見られる。この傾向は低・中学年において雨天時のみ来館とする学校が多数あること、特に低学年にその傾向が強いことからもうかがえる。それらの学校の多くは、晴天時はアスレチックや公園に行く予定で、その代わりとして当館を選んでいる。結果として「創造の広場」で走り回ったり、歓声をあげて楽しんだりといった、およそ博物館に似つかわしくない光景が展開されている。産業や科学に対する様々な展示物があるというよさが学校側に実感されていない実態にある。

また、中学年こそ僅差であるが、どの学年においても近隣地域よりも遠隔地域の利用校数の方が多くなっていることが分かる。近隣地域を広めに設定したにもかかわらず、このような状況なのだから、顕著な特徴であると言える。更に近隣地域における高学年の利用がとても少ないことも特徴として挙げられる。このことは高学年の観光バスを使つての校外学習となると、近場を選ぶことが少なくなることが理由として考えられる。現状のように多くが遠隔地域から観光バスを使用しての来館となると、せっかく高学年のレベルに合った展示物があるにもかかわらず、校外学習による来館者がリピーターとなることは難しい。逆に徒歩または公共交通機関を使用して簡単に来館できる近隣地域の学校の高学年児童に多く来てもらえればリピーターの増加につながる事が予想される。

以上のことから近隣地域の高学年の校外学習を増やしていくことが有効と考える。大きな課題のようであるが見方を変えれば伸び代があるとも言え、工夫をこらす価値は大いにあると考える。

(2) 実験・工作教室の現状

当館には「展示・運営協力会」という名称の、様々な企業・研究所・大学から当館の事業のサポートをしていただく組織がある。この展示・運営協力会が主催する実験・工作教室が、平成26年度も夏季休業中を中心に16回実施された。その際の参加児童が実験・工作教室を知った経緯についてまとめたのが、以下の表である。

表2 実験・工作教室を知った経緯

| | 児童数<人> | 割合<%> |
|--------|--------|-------|
| チラシ | 187 | 34.7 |
| ホームページ | 160 | 29.7 |
| 来館して | 149 | 27.6 |
| その他 | 43 | 8.0 |

「チラシ」がトップで、「ホームページ」「来館して」の二つが続いている。

「チラシ」が、学校で配布されたものを目にするという受動的なものであるのに対し、「ホームページ」と「来館して」は、まず自分が行動することから始まる能動的なものと言える。また後者二つは現代産業科学館のことをすでに知っているかどうかとも重要な要素となってくる。

つまり、当館への興味・関心を持っていれば、最新の状況・詳細が分かるホームページを見る機会が増えてくる。あるいは、きっと何か面白いことがあるという実感をもっていれば、とりあえず行ってみようということになる。以上のことから近隣地域の子どもの意識の中に、当館のことが十分に浸透していれば、「ホームページ」や「来館して」の割合が増え、「チラシ」の割合が相対的に減っていくことが予想される。

「ホームページで調べて知る。」「とりあえず来館してみる。」といった活動は、高学年になるほど表れやすいものである。校外学習の現状で浮き彫りになった高学年児童への浸透の薄さと表2の結果とは、決して無縁のものではないと考える。

そこで、特に高学年をターゲットに据え、まずは当館の存在を意識させ、次に当館のよさに気付かせ、最後に足を運ばせる、そういった手立てを講じていくことが重要であると考え。あわせて兄弟姉妹関係があれば、兄・姉の行動が、弟・妹にもつながっていくという相乗効果も期待できる。

3 意味のある総合的な学習の時間

前述した総合的な学習の時間に対する誤解は、趣旨・理念の理解が不十分のまま、先進校の実践を形だけ真似てしまい、時間をかけた割には子どもの成長が実感できないといったことから起きている。不十分な取り組みしか行わなければ、成果が表れないのは当然であり、それをもって総合的な学習の時間は意味が無いというとらえをすることは、明らかに間違いである。

一方で、本来の趣旨・理念に則り、質の高い実践を積み重ねている学校では、これからの知識基盤社会において重要とされる思考力・判断力・表現力等の育成に関し、着実に成果を出していることも紛れもない事実である。

そこで当館の学校支援を考えるに当たり、まず「意味のある総合的な学習の時間とはどういうものなのか」を問い直す必要がある。平成22年11月に文部科学省が発刊した『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開(以下:総合的な学習の展開)』において、学習指導の基本的な考え方について以下のような記述が見られる。

「総合的な学習の時間の改訂の趣旨を実現するためには、問題解決的な活動が発展的に繰り返される探究的な学習とすること、他者と協同して課題を解決する協同的な学習とすることが重要である。加えて体験活動を重視するとともに、思考力・判断力・表現力等をはぐくむ言語活動の充実を図ることが欠かせない。さらには、各教科等との関連を意識した学習活動を展開することなどを踏まえ、学習指導を行うことが大切である。」

今回、上記の趣旨を踏まえた意味のある総合的な学習の時間の実現にあたり、当館としてどのような支援が行えるか、更に2の項で述べた当館自体の学校とのかかわりにおける課題の解決を図る視点も含めて検討した結果、小学校高学年を対象にしたキャリア教育に関するプログラムを開発していくことが効果的であるとの考えに至った。

4 キャリア教育

平成 23 年 1 月 31 日に出された中央教育審議会『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)』によると、キャリア教育の定義は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」である。また同答申において「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしく生きていく過程を「キャリア発達」という。」との記述がある。以上のことから、目標の中に「自己の生き方を考えることができるようにする。」との文言が入っている総合的な学習の時間と関連性が高い領域であることが分かり、質の高い取り組みを組み立てやすいはずである。

しかし、職場体験活動の実施のみをもってキャリア教育を行ったものとみなす傾向も一部に見られるなど、なかなか質の高い取り組みになりきれない状況にある。

千葉県ではこういった問題を解消するために学校段階ごとに事業を企画し展開している。小学校では主に高学年児童を対象にした「ゆめ・仕事ぴったり体験」(就業密着観察学習)という事業がある。児童が働く人々に密着し仕事をしている姿を観察したり一部を体験したりすることで、その職業の内容について知ることを目指すものである。

その実施にあたり以下のような問題が生じている。千葉県教育庁教育振興部生涯学習課から出されている説明資料内の「働く人々の密着に関し、大人 1 名に対して児童 1～2 名程度が望ましい」という記述が独り歩きし、実現を困難にしている状況がある。これをそのまま実現させるためには、相当数の受け入れ先の確保、保護者の協力も含めた各受け入れ先への引率者の確保、各受け入れ先個々とのねらいのすり合わせも含めた打ち合わせ等が必要となってくる。このように越えるべきハードルが多く、負担感を強く感じる取り組みになっている。しかし、「望ましい」という表現からも分かるように、本来のねらいが実現されれば他の方法を模索しても構わないと考える。

ねらいについても密着した職業の内容について知るだけという誤解が生じている。そうすると前述したように「職場に行かせて終わり」という状況にもなりかねない。しかし前述した生涯学習課の説明資料において、職業の内容を知ること以外にも人間関係の大切さに気づき、人として生きていく上での必要な資質を高めることや、自分の将来の仕事や学校で学ぶことの意味などについて考える機会とすること等もねらいとして挙げられている。固有の職業の内容について知ることよりも、それを通じて自分の生き方や在り方を考えることにつながるということが重要なのである。

本来のねらいが達成されるならば、集団での受け入れを採り入れてもよいのではないだろうか。また教員経験者が職員の中に多くいるという当館は、学校側の要望も理解しやすい環境にある。このように前述した越えるべきハードルを無理なく超えることができる。当館としてもこの取り組みを通じて高学年児童の団体が訪れる機会が増えれば、「高学年の団体が少ない。」「雨のみ団体が多数。」「近隣地域の団体が少ない。」「学びの場としてのとらえが弱い。」といった当館の校外学習参加者の実態における弱点を補強することにもつながる。

以上のことから、小学校高学年を対象にしたキャリア教育に関するプログラムを開発し、各学校に提案・コーディネートしていけば、学校・当館双方に利点生まれ、win-winの取り組みが実現すると考えた。

5 プログラム案の作成

(1) 単元名

『総合的な学習の展開』において、単元名は「児童の学習の姿が具体的にイメージできる単元名にすること」「学習の高まりや目的が示唆できるようにすることに配慮することが大切である」と記されている。このことから生活科と同様に、児童の活動内容を単元名に記すのが分かりやすいと考える。そこで、今回の取り組みの単元名を「仕事の意味を学ぼう」とした。

(2) 単元目標

学習指導要領に例示された三つの視点に基づき、以下のような目標を設定した。

○千葉県立現代産業科学館で働く人々や身の回りで働く人々についての情報を収集し、情報から分かったことや考えたことをまとめ、表現することができる。 【学習方法に関すること】

○調査活動をもとに、それぞれの仕事の意味を知ることとおして、自分に合う仕事を見つけようという思いをもつことができる。

【自分自身に関すること】

○仕事を進めるうえでの礼儀やマナー、お互いが支え合って社会生活が営まれていることを知り、その一員として行動できるようになる。

【他者や社会とのかかわりに関すること】

(3) 学習過程

意味のある総合的な学習の時間を実現させる手立てとして探究的な学習にすることがあげられる。探究的な学習のイメージとして『総合的な学習の展開』において、以下のように記述されている。

「総合的な学習の時間において、探究的な学習とは「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」といった問題解決的な学習が発展的に繰り返される一連の学習活動である。」

そこで、この学習過程に沿ってプログラム内容を構想した。また、それぞれの学習過程において様々な他者と協同して課題を解決する協同的な学習が多く組み込まれるように配慮した。前述したように、意味のある総合的な学習の時間の実現のためには、探究的な学習と協同的な学習がともに担保されていなければならないと考えるからである。

ア 課題の設定

「仕事」を中心にウェビングを行う。小学生の場合、あまりイメージが広がらないことが予想される。ここでは仕事について今までほとんど意識せずにきた自分、よく分かっていない自分に気づくことが目的なので、書けなくても構わない。また、たくさん書けた児童についても、実は思い違いをしていた自分に最終的に気付けばよいわけで、どのような書きぶりでも問題は無い。むしろ、その書きぶりにより、プログラムの中身が変わってくるとも言える。

仕事について調べるためだけに当館にやってくるというのは、正直言って唐突な印象を認めない。そこで、千葉県の産業や科学について学ぶために当館に校外学習でやって来ることをあらかじめ決めておき、その際に働いている人の様子もあわせて参観し、仕事に関する様々なことも調べてみようとした方が、学習の必然性が生まれてくると考える。

まず、現代産業科学館ではどのような職種の人が働いているかを考えさせる。来館したことがない児童にとってはあまりイメージがわからないであろう。そこで、ホームページやパンフレットに載っている事業内容からかかわっている人を予想させてみる。そうすることで展示場にて説明する人や実験をする人あるいは受付にいる人といった具合に、目立つ仕事について気付かせる。更に学校や会社あるいはデパートなどイメージしやすい所に置き換えて考えさせ、なるべく多くの仕事に気づかせる。ある程度個人で考えさせた後、お互いに気付いたことを共有させ、内容の広がりを図っていく。これらの活動を通じて、自分たちが知らない仕事の数多くあることへの驚きにつなげていく。もちろん正式名称ではなく、子どもたちなりの表現方法で構わないが、館長・学芸員・主任技術員・展示解説員・受付担当・清掃員・警備員等の職種をおさえられるのが望ましい。

そして、どのような職種の人がいるのかイメージが持てたところで、それぞれどのような仕事をしているのか調べ、分からない部分は現地で質問することを確認し、今後の学習の方向付け及び校外学習への必要感を高めていく。

イ 情報の収集

(7) 学校での事前学習

具体的な仕事内容をワークシートにまとめる。インターネットや図書資料などによって調べたものだけでなく、自分なりのイメージからの想像でも構わないので、まずは書けることをどんどん書き込ませる。ある程度ワークシートへの記述が終了したら、グループ内で互いに検討し、加除訂正をする場面を設定する。それぞれが収集した情報を持ち寄ることで、情報量が増えるとともに、違う視点からの情報ももたらされ、時には矛盾するものが現われるかも知れない。しかし取り組みが進むにつれ、この矛盾点が解消されていけば、学習の意味を実感することにもつながる。このように各々の考えを伝え合うことで、協同的な学習を実現させ、質の高い学習につながっていく。この場面ではまだ結論を出す必要はないので、両論併記の状態でも保留し、実際に来館するときその解答が導き出されればよい。そうすることで、更に校外学習に対する切実感が高まっていく効果が期待される。

(4) 校外学習における当館での学習

事前学習を受けて校外学習当日を迎える。当館としてはリピーター獲得というねらいも持ち合わせていることから、徒歩で来館できない学校については、是非とも公共交通機関での移動としたい。公共交通機関による移動に関しては「(4) 公共交通機関の活用」の中で詳しく述べることにする。

来館後の流れであるが、当初の目的である「千葉県の産業や科学について知る。」という部分から入っていく。常設展示物や実験の見学、場合によっては体験活動にも取り組んでいく。その後、キャリア教育の一環として複数の職種の当館職員から仕事について話をしてもらう時間を設定する。話の内容に関して事前に打ち合わせを行い、子どもたちが気付かない部分も含めた大まかな仕事の内容、この仕事を選んだわけ、工夫していること、うれしいこと、困っていることを、必ず盛り込むようにする。事前学習の様子を確認しておけば、子どもたちが気付かない部分を必ず盛り込むことは可能である。以上のことは仕事に関する奥の深さを実感させていくことをねらった活動である。

また、この話を聞く時間のコーディネートを当館の教員出身の職員が担うようにする。理由は、当館職員として共に仕事をする者が進行した方が、普段多くの児童の前で話す機会が少ない職員もリラックスし話しやすくなることと、教員経験者が務めることで、学校側が望む内容を網羅することが可能になるからである。また、質問の時間を必ず設定する。質問の時間を通じて、話だけでは不十分だった部分も補うことが可能となる。

ここで休憩も兼ねて昼食をいれる。昼食後、コーディネーター役の職員が、都合で話ができなかった他の職種の職員の話や、午前の部で不十分だった部分を補足する話をする。この際に気をつけたいことは、結論を端的に言うのではなく、いくつかの付随した情報を与え、子どもの気づきを促すということである。一例として「各職員がそれぞれの持ち場で工夫をこらし、お互いに助け合い、仕事に取り組んでいる。」と言ってしまうのではなく、それぞれの職員が工夫していることを列挙することに留め、お互いの協力については児童に気付かせるといったことが挙げられる。

話を聞いた後の午後もあらためて見学の時間を設定し、働いている人の観察を重点として行わせると効果的である。午前中の話とリンクさせて見学すると、新たな発見があるかも知れない。場合によっては仕事に支障が出ない範囲で、職員へのインタビューも行えるようにすると、突っ込んだ内容の調査活動や、大人を巻き込んだ協同的な学習が実現する。

ウ 整理・分析

当館での校外学習における調査活動を受けて収集した情報をワークシートにまとめさせていく。事前にかけていたことで間違っていたことは訂正し、新たに分かったことは書き加えていく。加除訂正の部分は朱書させることで、学習の道筋が明確になるようにする。あわせて、違う仕事でも工夫している観点やうれしいことなどで共通点がないかを検討させ、必要に応じてあらためて電話・FAX・メール等を通じて、現代産業科学館に問い合わせをする機会を設定する。その際に当館の窓口を一本化しておくことで、事情も分かりスムーズに事が運んで行く。

更に保護者への仕事に関するインタビューを実施し、保護者が行っている仕事との相違点があるかの検討をさせる。キャリア教育と家庭教育との関連を重視して実施することは、生涯学習課の説明資料内にも記述が見られ、重要な視点である。将来就業するにあたり、家庭の協力は不可欠となる。そういう意味でも保護者と児童が将来のビジョンについて語り合う機会をもつことは有意義である。あわせて保護者の仕事ぶりから、尊敬や感謝の念をもつことができれば最高である。

今回調べた仕事の中で一番向いているもの、やりたいものは何かを探し、その理由も明確にする。そうすることで、調べた事柄を自分ごととしてとらえ直すことにつながる。調べた仕事の中からということで選択肢が少ないとも言えるが、まずはそれで実施し、今回の学習がひと段落したところで更に選択肢の幅を広げ、同様の取り組みを行っていくようにする。また仕事で一番大切なことは何か、自分なりの考えをまとめる。ここの視点をおろそかにすると、前述した「固有の職業の内容を知る」ことで学習が留まる危険がある。一人ひとりが責任をもって取り組めるよう、原則としてここまでは個人での取り組みとする。

その後、個人で作成したワークシートを用い、グループで討議する機会を持つ。この際に自分が一番向いているあるいはやりたいと感じた仕事が共通の者でグループを構成する。仕事が共通でも選んだ理由が違ったり、とらえ方が違ったりすることが考えられる。その違いを利用し議論していくと、より深い思考につながる。

エ まとめ・表現

グループでの討議を十分に行った後に、何を誰にどのように伝えるかの検討を加えていく。内容については「整理・分析」の過程で示した各仕事の共通点や仕事で一番大切なことは必ず盛り込むこととする。そうすることで、各グループのまとめがリンクするように配慮する。このような手立てをとらないと、グループごとのまとめに関連性が薄れ、ともすると自分たちのまとめのみに目が行ってしまうという弊害が生まれる。この弊害を排除することで、各グループ間においても協同的な学習が成立するようにしていく。

また、相手意識をしっかりとつことが重要である。相手によって手法は変わってくるはずである。効果的な相手としては、隣接の下学年または保護者、場合によっては職業体験を行った中学生が望ましいと考える。隣接の下学年は相手が次年度の取り組みのイメージを持てることにつながり、次年度以降の学習の質の高まりが期待される。保護者は、仕事に関するインタビューという学習を事前に経ているだけに、積み重ねのある学習となる。中学生は仕事に対する考えについて意見交換をし、実際に経験したから得た知見を伝えてもらうことで、新たな発見が期待される。昨今小中一貫・連携教育にスポットが当てられており、そういう視点からも提案性のある取り組みと言える。

理想としては、児童から望ましい相手先が提案できるようにしていきたい。そのためには、調べた内容を伝えることや発表会を行うことの意義を意識させ、その意義を高めるためには誰に伝えれば効果的なのかといった具合に、手順をおって考えさせ、児童との合意形成を図っていきたい。

表現方法としては、隣接する下学年が相手の場合は、新聞・レポート・パンフレット・ポスター・パワーポイント等あるいは寸劇といったものが考えられる。保護者や中学生が相手の場合は、これらのことに加え、パネルディスカッションやシンポジウム形式によるものも考えられる。お互いの意見を出し合い、相違点に関する気づきから、新たな発見が期待されるパネルディスカッション・シンポジウム形式による表現は、協同的な学習の実現という視点からも、より効果的な手法である。

いずれにしても、この学習過程で一番注意すべきことは、「調べたことをまとめ、それを誰かに表現する。」ことが最終目的であるという勘違いを生じさせないことである。このことは手段であり、それ自体が目的ではない。つまり自分の考えをより深くし、新たな課題を創出させるための手段であるというとらえが必要である。誰かに表現する活動を通じて、再度仕事について考え、それを自分ごととしてとらえ直し、真に自分に合う仕事は何なのか、その実現のために何をしなければならぬのかといったことに、学習のベクトルが向くような支援が必要である。

(4) 公共交通機関の活用

公共交通機関を活用した校外学習について、あらためて述べる。

事前に、インターネットなどにより、学校から当館までの経路・運賃・乗車時刻を調べるなどの活動を取り入れる。児童の実態によっては、学校をスタート・現代産業科学館をゴールとする完全なグループ活動による移動に挑戦させる。家族の車による移動が多い現代の児童にとって、公共交通機関による移動だけでも、結構大きな問題解決活動である。思いもよらないハプニングが、児童をたくましく成長させていく。私自身、6年担任の時に佐倉にある国立歴史民俗博物館の見学に対して同様の取り組みを行ったことがある。その際には電車の上り・下りのホームを間違えて改札口を通った児童が、駅員に事情を話し、改札口を出て反対側のホームに行かせてもらう場面があった。また誤って大人の切符を買ってしまった児童が、やはり事情を話し、払い戻しを受け買い直す場面もあった。いずれにしても児童への事前指導と経路の危険地域の把握ならびにそれへの対応をしておけば、実現は可能である。

これらのことは、本プログラムの主たる目標に相当はしないが、現行学習指導要領に記された総合的な学習の時間の第1の目標には合致する部分である。

また、公共交通機関を活用した校外学習とすることで、別の機会に子どもだけで来館することが可能になる。本プログラムに関することで、再度調査活動が必要になったときに、自らの意思で来館ができる。波及効果として、調査活動において当館のホームページを見ていく中で、本プログラムとは別件の当館の展示物や実験・工作教室等のイベントに興味をもち、来館することもある。いずれにしても、小学校高学年児童の来館者数の向上につながっていくはずである。場合によっては子ども同士の口コミにより、更に利用者の拡大が図れるかも知れない。私自身が学校にいた時の経験上、残念ながら教員が博物館関係のホームページやチラシを詳細に見ることは少ない。したがって、実際に来館し、口コミによる情報の方が、広がりという面では効果的であると考えられる。

6 おわりに

県内の小学校の御協力をいただき、構想したプログラム案を実践に移し、実際の取り組みの様子や実施後の振り返り、相手先の教員や児童へのアンケート調査などから、成果と課題を洗い出し、机上のプランから血の通ったものへと変容させて初めてプログラム開発と呼べる。しかし今回は動き出しが年度の途中だったため、プランの段階で留まっている。したがって今回構想したプログラム案が果たして本当に各小学校のニーズに合ったものなのか、そして当館の来館者の動向の改善につながるものなのかの検証を行えていない。

そこで、来年度に継続していく研究というところえをし、今後は以下のような流れで取り組みを進めていきたいと考えている。まず、近隣の小学校に今回構想したプログラム案に関する広報を行っていく。次に、興味を示していただいた学校と連絡を取り合い具体的な流れを決めていく。プログラム案では丸一日の校外学習を想定しているが、学校事情により半日程度となることも考えられる。あくまでも構想したものは案に過ぎないので、そのことをふまえて柔軟な対応をしていきたい。そして実践に移していく。実践を進めていくにあたり想定外の事態に遭遇したり、先方の学校の考えから軌道修正を余儀なくされたりすることも予想される。しかし、総合的な学習の時間の本来の趣旨からすれば、その方がむしろ自然とも言える。最終的には実践の反省をもとに、よりよいプログラムに練り上げていく。

今回目指すべきことは、質の高いキャリア教育の実現にむけて支援を行い、あわせて当館の来館者の増加につなげていこうとすることである。その実現のためによりよい方法を常に模索することが肝要であり、絶対にこうあらねばならないというような硬直的な思考は排除していく必要がある。学校の思いと当館の願いを融合させ、双方にとりプラスとなるものに取り組みを高めていきたい。あわせて研究のための研究に陥らないように気をつけ、目の前の児童の実態に寄り添い、その児童の成長につなげていくという本来の教育の趣旨を常に意識しつつ、取り組みを行っていきたいと考える。